

# The Cambridge Gazette (V. 3)

## Personal Letter to Mr. Sato (尊敬する佐藤泰男氏にお送りする私的通信文)

『ケンブリッジ・ガゼット (V. 3): 長目飛耳樹明編』  
第 28 号 (2010 年 12 月)

ハーバード大学  
ケネディ・スクール  
シニア・フェロー 栗原 潤

一に曰く、長目(チョウモク: 遠方のモノを見通すこと)、二に曰く、飛耳(ヒジ: 遠方の事柄を聞き取ること)、  
三に曰く、樹明(ジュメイ: 明察力を具えていること) 『管子』より (松陰先生の『飛耳長目』を倣って…)

### 今月号の目次

1. 2010 年最後のハーバード便り
2. 情報解説
3. 編集後記

#### 1. 2010 年最後のハーバード便り

光陰矢の如し—2010 年も残り 1 ヶ月となった。佐藤泰男氏に今年最後のケンブリッジ情報を謹んでご報告する。ボストンを 9 月 30 日に離れ、欧州・日本・ヴェトナムで過ごした筆者がハロウィーン(10月31日)の夜に米国に戻ってみると、ボストンは落葉の季節を迎えていた。さて、優れた「ヒト」との出会いがまことに素晴らしい—知的刺激や心暖まる感動を必ず与えてくれる。10月28日早朝、ハノイから成田に戻った筆者は、そのまま東京に向かい政策研究大学院(GRIPS)の黒川清教授のオフィスを訪れた。黒川先生は今の様な混沌とした時代に人々を導くのはどんな「ヒト」か?、と質問された。それに対し筆者は「哲学者」と答え見事に外してしまった—正答は「詩人」だ。確かに、混沌とした世の中で人生の指針となる大切な概念・精神を優れた語感で数少ない言葉に凝縮し表現する詩人こそが、人々の暗い心に一筋の光の様に希望をもたらす—第2次世界大戦時、ナチス・ドイツの猛襲に対しチャーチル首相は格調高い韻文で英国民の勇気を奮い立たせた。また冷戦時の核戦争に対する恐怖と人種差別等国内不安のなか、ケネディ大統領は、“Ask not what your country can do for you. Ask what you can do for your country”と、責任感の強い米国の良民を鼓舞した。11月2日の中間選挙で大敗を喫したオバマ大統領に対し、*New York*

*Times* 紙のニコラス・クリストフ氏は、翌 11 月 3 日、“Mr. Obama, It’s Time for Some Poetry” と題して“Please, Mr. Obama! The prose needn’t be as dry as the *Harvard Law Review*. And we wouldn’t mind being lifted by an occasional verse of poetry. . . . (Mr. Obama) must confront the economic crisis emotionally as well as intellectually”と語った。即ち、人々は学術雑誌の中の冷たい理知的な散文ではなく、熱い詩歌・韻文を求めている。また理知的な散文を得意とするプリンストン大学のポール・クルーグマン教授も同紙翌日の小論(“The Focus Hocus-Pocus”)の中で、“Mr. Obama’s problem wasn’t lack of focus; it was lack of audacity.”と、繊細な伶俐さよりも熱い豪胆さを時代が求めていると仰っている。そして今、我が日本も格調高い韻文で人の心に火を点ける詩人や詩心溢れる指導者の登場を待っているのかも知れないと考えている。さて筆者の好きな詩人と言えば、最近では谷川俊太郎氏であり、時代を遡れば歌人としての夏目漱石と石川啄木、そして外国の詩を、日本文学を基に見事なまでに訳した上田敏だ。5 年前、上田敏の名訳「われは生きたり(Je vis...)」の原詩を所収する本(*Les clartés humaines*)を本学図書館で発見し大感激だ。また漱石の俳句の中で一番好きな句—「菫(すみれ)程な小さき人に生まれたし」—は親友の正岡子規に贈ったものだが、これは英国詩人ワーズワースの詩(“The Lucy Poems”)と詩情を共にしている。このように語感を大事にする「ヒト」には国境・時代が関係無い。因みに谷川氏は詩人であると同時に国民的アニメの 1 つ、『鉄腕アトム』の主題歌を作詞したことでも有名だ。現在の日本は、「心やさし…科学の子」たるアトムの様な 10 万馬力の鉄人によって救ってもらわなくては、と思っているのは筆者独りではあるまい。

## 2. 情報解説

10月31日、成田空港でエズラ・ヴォーゲル本学教授と偶然出会い、同じフライトでボストンに向かった。先生からは、ご自身のご講演をされた札幌での日本国際政治学会の様子を伺った。同時に筆者は小誌前号で記した欧州の対中観や、10月25~26日にハノイで開催された会合についてご報告した。ヴォーゲル教授は、ケンブリッジに集る日本人を対象として所謂「ヴォーゲル塾」という活動をなさっている。教授は筆者に向かい、この活動に関して「日本を再び魅力ある国にするためにはどうしたら良いのか…」と仰った。これに対し筆者は、「私自身も残念ながら妙案を持っていません。ただ私はもう不平を言うことが許される歳の間人ではなくなりました。今は私なりのスタイルで、成否はともかく突撃するのみです。言わば日本再生のための平成の特攻隊員の1人です。『栗原のような無能な輩でもハーバードで素晴らしい人々に囲まれ、この程度の事が出来るのなら…』と、優れた若人が私を乗り越えて素晴らしいことをしてくれれば、日本は絶対に良くなると思っています」と申し上げた次第である。

さて上述のハノイでの会合とは、日本政府出資の国際研究機関、東アジア・ASEAN 経済研究センター(ERIA)が本学と協力して開催し、また9月24日に発表された米・ASEAN 首脳会議後の共同声明の最後でも言及された“Evolving ASEAN Society and Establishing Sustainable Social Security Net”と題した会合である。筆者はこれに関して東京大学の林良造教授から本学との「連絡役」を仰せつかったが故に、ERIAのご招待で初めてのハノイを体験した次第である。会合ではERIAの西村英俊事務総長やチーフ・エコノミストで慶応大学の木村福成教授にお礼を申し上げますと共に、ヴェトナムのグエン・タン・ズン首相、スリン・ピッサワンASEAN事務総長、そしてアーサー・クラインマン本学アジア・センター所長による冒頭の挨拶を伺うことが出来た。

そして最初の発表者は、筆者にとって本校第1の恩人、デニス・エンカネーション教授で、教授の見解を感慨深く伺うことが出来たことは大きな喜びだった。教授はアジア諸国の目覚ましい経済成長に注目しつつも“Power of Incumbency”と称し、日中両国を除き、経済大国の上位は依然として米欧諸国が多数派を占めることを指摘された。そして世界政治経済は劇的な変化というよりも緩やかな軌道修正を伴いながらの変化が予想されると述べられた。それを聴きつつ、*The Economist* 誌が10月7日付記事“*And Never the Twain?*”の中で触れた、リー・クアンユー行政大学院のキショール・マブバニ院長の不満を思い出していた—即ち、アジアの台頭に対して無関心で、内向き・保守的な欧州首脳の状態に、アジアの指導者は憤慨している。同時に現在多くの人から賞賛を受けているスタンフォード大学の碩学、イアン・モリス教授の近著(*Why the West Rules—For Now*, Farrar, Straus and Giroux, Oct.)を思い出していた。同書は本学のスター的存在、ニオール・ファーガソン教授も*Foreign Affairs* 誌最新号(Nov./Dec.)の中で、“must-read book”として絶賛している。因みにファーガソン教授は、10月11日、ソウルで開催されていた国際会議(World Knowledge Forum (WKF))で、クルーグマン教授と共に登壇し、楽しい対話を我々の前に見せてくれた。またWKFでは、時代の寵児、ニューヨーク大学のヌリエル・ルービニ教授も熱弁を振るっていたが、筆者が残念に思ったのは「日本の発言」が聞こえなかったことだ。日本の対外発信の重要性を訴えている筆者としては残念でたまらない。この日本の対外発信に関連して、日本ペンクラブ会長の阿刀田高氏が、9月末に東京で開催された「国際ペン大会」について『文藝春秋』誌10月号に小論を載せ、「日本文化の発言力をこれを機にどう高めるか、そのあたりにこそおおいに思いを馳せなければなるまい。日本の立場から強く訴えたいことは…日本文学の海外への翻訳・出版、これがなければ交流もへちまもないのである」と述べておられる。まさしく筆者も同感である。

月日は遡り、欧州出張時の出来事に関して紙面の制約上前号に記せなかったこと—スイスと英国での思い出—に触れる。チューリッヒでは元本校フェローのミヒャエル・ヒルプ氏(小誌2004年6月号や2006年1月号を参照されたい)がスウェーデンやポーランド、そしてオーストリアの友人達にも連絡をしてくれて中欧・東欧における中国の活動に関し様々な情報を提供してくれた。そして素人ながら中立国であるスイスやオーストリアでの情報収集の醍醐味を垣間見たような気分させてくれた。更には第2次世界大戦中、正確な情報収集活動を粛々と行ったスウェーデン公使館附駐在武官、小野寺信帝国陸軍少将を思い出し、チューリッヒ滞在中、アマゾンを通じ『バルト海のほとりにて』を注文した次第である。同書は小野寺少将の妻、小野寺百合子女史が綴った記録である(モスクワやベルリンと異なり小国の武官室には、「補佐官も電信官もなく、武官夫妻で暗号書の保管から暗号電報作業まですることになっていた」が故に、小野寺女史は帝国軍人である夫と共にした経験を基に同書を著した)。「武人の妻」らしく語り方は控えめで派手な表現が無いために逆説的ではあるが淡々と語られる史実に迫力が増す。小野寺少将はヒトラーとスターリンによって分割された悲劇の国ポーランドの情報将校から独ソ両軍の動きに関する情報を得ていた。それが故に①欧州戦線におけるドイツの苦境をいち早く察知し、②独軍の英国本土上陸計画を否定し、逆にソ連侵攻を予言し、③ソ連の対日参戦を事前に報告していたのである。もし小野寺情報を東京の大本営が冷静かつ分析的に受け止めていたならば、悲劇的なシベリア抑留もまた戦後の中国残留孤児という悲しい問題も防げたかも…と素人の筆者でも心が痛む。真珠湾攻撃の日の夜、ドイツの友人が訪ねて来た時の記録も痛々しい—日本の対米英開戦によりドイツは一体どうなるのか…、米国は欧州での参戦の機会を狙っていたから日本はその口実を作ったことになる。ドイツ人の落胆ぶりは案外ドイツ人の本音で…ドイツは足手まといのイタリアを抱

え、戦線は欧州だけでなく南はアフリカにまで延び、東はソ連に深入りし過ぎて既に敗色が見え出している矢先、巨大な物量を持つ米国を敵に廻すことになったのだからたまらない、と。また真珠湾奇襲前の1941年4月、松岡洋右外相のベルリン来訪時に陸軍駐在武官会議が開催されたが、主題は独軍の英国本土上陸作戦であった。スウェーデン駐在の小野寺大佐(当時)独りが「独軍ソ連侵攻説」で、判断不能としたモスクワ駐在の山岡道武大佐を除き、全員が「英国本土上陸説」であった。特にベルリン駐在補佐官の西郷従吾大佐は、「大島浩駐独大使と共に実際に多くの英本土上陸用艦艇を見せてもらった」と発言したから、小野寺情報は完全に無視される(後にドイツが、ドイツ側の情報を鵜呑みにする大島大使を逆に利用し、対ソ侵攻のための「偽情報による攪乱作戦(disinformation)」として英本土上陸を宣伝させたことが判明する(例えば Carl Boyd, *Hitler's Japanese Confidant: General Oshima Hiroshi and MAGIC Intelligence, 1941-1945* を参照)。また当時、欧州情勢を吉田茂駐英大使と共に客観的に観察していたロンドン駐在武官の辰巳栄一少将はこの会議を欠席した)。かくして小野寺情報をはじめ有能な情報将校や冷静な外交官・ジャーナリストが送る海外情報を無視した視野狭窄の昭和日本は、惨めな敗戦へとまっしぐらに駆け抜けて行った。このように折角の情報も、「情報の受け手」がその価値を理解しなければ何の意味も成さない—(a)自らのドイツ語に陶醉して、ヒトラー総統やリッベントロップ外相の言葉を鸚鵡返しし「在独独逸大使」と揶揄された大島大使の言葉を信じ、スイスやドイツに駐在したにもかかわらずドイツ語すら正確に理解出来なかった東條英機首相、(b)東條首相の側近で、駐米経験を持つが故に帝国陸軍内で「米通」を自負していた佐藤賢了中将(実は在米時ホームシックに罹り、日本語新聞ばかり読んでいた人なのだが…)、そして(c)米国で劣等感にさいなまれつつ生活を送り、醜悪な英語に自己陶醉する松岡外相…。こうして振り返ってみると当時の記録は余りにも悲しい。



小野寺少将は、ドイツの名将ハンス・フォン・ゼクトの姿勢—政治家と軍人及び政治的判断と軍事的判断の峻別—に感銘を受け、彼の『一軍人の思想(*Gedanken eines Soldaten*)』、特に「政治家と将帥(*Staatsmann und Feldherr*)」の部分に銘記したという。筆者は本学図書館で同書を見つけ、『バルト海のほとりにて』の中で引用されている「講和締結の提議は将帥から出ることがあり得る(*Die Anregung zum Friedensschluß kann vom Feldherrn ausgehen.*)」で始まる部分を読みつつ感慨に耽っている。

英国出張時、オックスフォードの友人達と楽しんだ10月11日夜の会話は忘れられないものとなった。彼等は筆者同様、素人ながら日本政治を不思議そうに眺めている。筆者が「一言で表現すれば“the Serbonian Bog”だよ」と言った途端、彼等の顔に微笑みが浮かんだ。と同時に困惑した様子も隠さなかった。「セルボニスの沼(*the Serbonian Bog*)」とは、詩人ミルトンが『失樂園(*Paradise Lost*)』の中で、また政治家バークが『フランス革命の省察(*Reflections on the Revolution in France*)』の中で「底無し沼」の意味で使った表現だ。友人の中には本学で知り合い、オックスフォードで博士号を取得したばかりの若い中国人研究者も混じっていた。彼女は筆者に向かい次の様に語った—「私は大学生時代の1年間、日本に留学したの。それには家族も大学の友人も皆が反対したけど、日本の人々はとても親切で、一言も日本語が出来ない私だったけれどとても楽しい思い出だった。ただ研究者として世界の人々と付き合う将来を考えた時、私はオックスフォードを留学先に選んだのよ」と。彼女の話聞き、筆者は複雑な心境になってしまった。また英国の友人達は3月に友人のジェイムズ・ショフ氏と共に書いた論文(“For Whom Japan’s Last Dance Is Saved—China, the United States, or Chimerica?”)に対する感想を楽しそうに語ってくれた。ポピュラー音楽が好きな読者なら表題を一見して「ラスト・ダンスは私に(“Save the Last Dance for Me”)」を思い浮かべて頂いたと思う。ただ

越路吹雪さんの歌で憶えていると難しいが、例えばマイケル・ブーブレ氏の歌で口ずさむ方なら論文の中の文章に歌詞が見え隠れする部分があるのにお気付きであろう。これが刺激した訳でもないだろうが、ピーターソン国際経済研究所(PIIE)のアダム・ポーゼン氏が日本経済に関して6月に発表した論文の表題を見て噴き出した—“The Realities and Relevance of Japan’s Great Recession: Neither *Ran* nor *Rashomon*”、と(嬉しいことに謝辞の形で筆者の名前を載せてくれるのは有り難いが、アルファベット順だからクルーグマン教授の直後に載るので恐縮してしまう)。そして前号で触れたバンク・オブ・イングランド前副総裁のジョン・ギーヴ卿と、「アダムは『世界のクロサワ』の『羅生門』とか『乱』とか、話しているけれども…」と微笑みつつ彼の論文について議論していた。こうして友人達と楽しんだ英国での会話を思い出し、冒頭で触れた黒川先生のお話—混沌とした時代には、時代精神を表現する言葉を的確に選択出来る詩人の役割が重要—to改めて頷いている。また英国では友人達と共に、チャーチルが1943年に本学から、そして1949年にはMITから名誉学位を授与された際の名演説を語り合ったが、黒川先生の研究室を訪れた時、先生は書棚からチャーチルやケネディの本を取り出し筆者に「彼等は言葉を丁寧に選んでいるね」と仰った。かくして優れた「ヒト」は、国境や時代(そして専門分野)に関係無く共通点が多いと銘記した次第だ。ただ誤解を招かぬように付記すれば筆者は日本国民全員が詩人になるべきだとか、外国語に堪能でなくてはならないとは思っていない。10月号で触れた筆者のニューヨークでの講演の際、或る日本人が「中国人ビジネスマンの方が日本人ビジネスマンより英語が上手だから問題だ」という指摘に対して筆者は次の様に応えた—「ビジネスマンにとって最も重要な資質は『商才』です。従ってビジネスマンにとって重要なのは、外国語に長けた人材を如何に効果的・効率的に活用するか、です」と応えた。この筆者の対応に対し高い評価をしてくれたのが講演会に参

加していた本学ビジネス・スクール(HBS)の友人だ。彼と共に来年春、日本のビジネスマンが国際舞台で『商才』を磨くような短期研修・討論プログラムを筆者所属のキャノングローバル戦略研究所(CIGS)で開始する予定だ。ご関心と勇気のある優秀な方々には是非とも参加して頂きたいと思っている(但し残念ながら、この場合に限り英語が必須ではあるが)。

小誌 10 月号で触れた英語教育の専門家、東京大学の斎藤兆史教授が唱える「指導者が持つべき語学力」には説得力がある—教授はご著書(『日本人に一番合った英語学習法』)の中で名宰相伊藤博文の英語を高く評価され「政治家としての伊藤の英語について注目すべきは、その臨機応変な運用の仕方である。外国の動向を学ぶべく自ら英書、英字新聞を読み、状況によって通訳や翻訳者を使う場合もあれば自分で英語を話す場合もある。このバランス感覚には大いに学ぶべきものがある」とし、「国益にかかわる重大事を、いい加減な英語でペラペラ伝えることほど危険なことはない」と語る。また小学校の英語教育を憂慮される教授に筆者は共感を覚える—英語の下手な教師から学ぶことを余儀なくされる小学生を憂慮され、「将来日本を背負って立つ、英語達人になる可能性のある子供の語感までが狂わされ、小器用に日常会話だけはこなすことができるものの、高度な議論にはまったくついていけない、低級な英語使いが大量生産される危険性がある」と仰っている(筆者は「将来、芸術や調理そしてスポーツの名人になるような有望な子供達に変な英語教育のために学校嫌いになり、母国語までもが変になってしまうかも知れぬ」と公言している)。

### 3. 編集後記

以上で *Cambridge Gazette* (V. 3)、長目飛耳樹明編第 28 号を締めくくる。今の課題は、(日本語も含めた)言葉と専門知識に関した「中途半端さ」だ。本学にも「最近の英語論文を全く読んでいないのでは? 国際会議に出席した

経験が浅いのでは?」と疑いたくなる English-deficient expert (EDE) (英語力の弱い(自称?)専門家)—特に日本人(English-deficient Japanese (EDJ))—が時折訪れ筆者は呆れかえっている。筆者が常々力説する「知的情報発信力」は、①専門性、②情熱/ユーモアの精神、③教養溢れる語彙、④時間当たりに語られる単語数、⑤与えられた時間 (聴き手の関心の高さに依存する)によって左右される。日本が衰退の一途を辿るなか、日本人の話に耳を傾けてくれる外国人は極端に少なくなってきた。“Japan as Number One”と世界が讃えていた頃は、聞き辛い発音の幼稚な英語であっても相手は我慢して日本人の話を聞いてくれた(即ち、⑤はタップリ有った)。が、今はそうした寛大さを相手側に期待出来ない。寧ろ嘗ての栄光にすがりつき、また自らの役職や年齢を誇示して尊大な態度を示す日本人に対して不快感すら示す外国人が目立つようになってきた。かくして我々日本人は自助努力(即ち上の①~④)で「知的情報発信力」を高めるしかない状況にある。さて英国で筆者は友人から「ジュンは(英語の)言葉の選び方が良い」と言われて恥じ入ってしまった—斎藤教授のご著書から、将棋の達人、升田幸三氏の言葉を孫引きさせて頂けば、「辿り来て、いまだ山麓」の心境だ。そして今、人と人の心をかよわせる手段としての文章の長所と短所、更には日本語の長所と短所を丁寧に解説した文豪谷崎潤一郎先生の『文章讀本』を読み直している。

以上

栗原 潤	Jun Felix KURIHARA
ハーバード・ケネディ・スクール	Senior Fellow,
シニア・フェロー	Harvard Kennedy School (HKS)
キャノングローバル戦略研究所	Research Director,
研究主幹	Canon Institute for Global Studies
連絡先	
Mailing address: 79 JFK St., Ash Center, Cambridge, MA 02138	
Office address: 124 Mt. Auburn N235, Cambridge, MA 02138	
Tel: +1-617-384-7430; Fax: +1-617-496-4602	
Email: Jun_Kurihara@hks.harvard.edu; Kurihara-Jun@rieti.go.jp	
(日本での連絡先) 〒100-6511	
東京都千代田区丸の内 1-5-1 新丸の内ビルディング 11 階	
Tel: 03-6213-0550 (代); Fax: 03-3217-1251	
過去の <i>Cambridge Gazette</i> は全てネット上で見ることが出来、ダウンロードも出来ます。ネット上で「Google グループ」のウェブサイトに行き、そこで「Cambridge Gazette」と打ち込めば、 <i>Cambridge Gazette</i> が載せてあるサイトに導かれます。	